



おばあちゃんがいてくれた日

神奈川県・フリーター
菅野 千代

横浜駅東口平沼の角、60年の歴史を持つ老舗蕎麦屋「角平」で働き始め1年が経った。

先日母から祖母が亡くなったという連絡が入り、もう20年近く前に祖母と二人で蕎麦屋に行ったある冬の一夜が蘇ってきたのだ。

当時小学2年生だった私は、転校先の小学校や母の再婚相手と折り合いが着かず、その日も母と大喧嘩をし、一人祖母の家に向かっていた。母が電話したのか祖母は私の顔を見るなり、帰りなさい、と言いだアを閉めた。

込み上げる悲しみでいっぱいになりながら来た道を戻っていると、祖母が駆けてきて、「お腹空いているでしょう。美味しいお蕎麦をおばあちゃんと一緒に食べようか。」と言って私の手を握った。蕎麦屋は混んでいて私たちは並んで座り蕎麦を食べた。母の待つ家へ早く帰りたくない私が蕎麦を1本づつ食べていると、堪忍してね、と祖母が溜め息のようにぼつりと言ひ、それから私をしっかりと見て「たくさん本を読みなさい。いろんなものを自分の目と耳と心でしっかりと見聞きしなさい。いろんな所へ出掛け、たくさんの人に出会い、心を耕して、蕎麦のように踏まれても踏まれても負けなくて、本当の勉強をしなさい。人を憎まないこと、自分を責めないこと、ひたむきに生きること。」そう言っつて祖母は私の頭を撫でた。帰りたくない、と言ひ私は泣いた。「蕎麦はね、大昔は特別な日にしか食べることの出来ない御馳走だったんだよ。だから蕎麦を食べるに体にくさんの力が入ったから、これからはいろんなことがうまくいくからね。」そう言っつと、祖母は私をタクシーに乗せた。

その後友だちもたくさん出来て祖母から少しづつ離れて、あつという間に年月が過ぎた。

祖母が亡くなった、と受話器の向こうで母は言い、忘れていた祖母の言葉が走馬灯のように脳裏を駆け巡った。おばあちゃん、今働いているお蕎麦屋さんのお蕎麦は、昔おばあちゃんと食べたお蕎麦にどこか似ているよ。そつと目を閉じて、お蕎麦に手を合わせた。

奨励賞